



信友会会報

2012年1月

<<11月例会より>>

信友会11月例会は名誉牧師の大宮溥名誉牧師を迎え、「日本のキリスト教」について語っていただきました。

多くの宗教が並存している日本社会にあつて、キリスト教を救済史的な視点から述べ、私たちキリスト者としての生き方について共に考える時をあたえられました。

信友会 11月例会

「日本のキリスト教 ～救済史的展望～」

大宮 溥

ヘブライ人への手紙 11:1~3, 8~16

日本のキリスト教伝道と教会の現状

日本のキリスト教は、シャヴィエルが鹿児島に到着した1549（天文18）年に始まりましたが、1612（慶長17）年に徳川家康がキリシタン禁止令を出し、1638（寛永15）年の島原の乱以後ほとんど断絶しました。近代に入って（ベッテルハイム的那覇上陸は1846<弘化3>年ですが）1859（安政6）年プロテスタント宣教師の来日以来、150年を経過しました。

2011年のキリスト教人口はプロテスタント 657,272、カトリック 441,592、オーソドックス 10,380、総数で1,121,694と推定され（『キリスト教年鑑』による）、日本における人口比は0.8880といわれています。そのうち、日本基督教団は、信徒数182,418、現住陪餐会員数90,184、礼拝出席者1主日平均56,240であります。ある人は日本では宗教信者の数え方が曖昧で、元日などに神社仏閣を訪れる人さえ信者と見なすので、そのように考えると、キリスト教に関心をもっている人は全人口の30%位になるという人もいます。このような日本社会の状態において、キリスト教が他の宗教と共存して歩んでゆくにあたって、他宗教をどのように考え、その信者の人たちとどう接していったらよいのかについて、考えたいと思います。



宗教的複合社会の中でのキリスト教

日本社会はこれまでも宗教的複合社会でしたが、今日グローバル化が進行して、かつてはキリス

ト教社会といわれていた欧米社会でも、イスラム教、アジア起源の諸宗教の信者が多く住みつくようになり、宗教的複合社会になりました。そこで、キリスト教界でも、キリスト教と他宗教の関係をどのようにとらえるかという「宗教の神学」が、真剣に論じられています（一例として、古屋安雄『宗教の神学』1985年）。大きく分けると、①宗教的多元主義、②排他主義、③包括主義という三つの考え方があります。

第1の「宗教的多元主義」religious pluralismは、宗教を、それぞれその背後にある「神的なもの」がそれぞれの個別性においてあらわれ出たものであるから、各個宗教は他の宗教も自分たちと同等の基礎を持つものとして受けとめるべきであると考えた立場です。ジョン・ヒックが代表的で、彼は「神は多くの名をもつ」と述べています。



第2の「排他主義」exclusivismは、キリストの救い以外のものは、すべて偶像礼拝であるとして、排除するもので、この立場を非常に鮮明に打ち出している人としては、カール・ブラーテンなどがあり、彼には『二つとなき福音』No Other Gospel という著作があります。

第3の「包括主義」inclusivismは、キリスト教の救いと啓示に神の働きの中心的な意義を認めるのですが、他の宗教にも霊的な力と愛の働きを認めるもので、プロテスタントのパウル・ティリッヒや、カトリックのカール・ラーナーなどが代表的で、ラーナー（第2ヴァティカン公会議の指導的な神学者）は「他宗教信者も匿名のクリスチャン anonymous Christians である」と言いました。

救済史における福音と諸宗教

わたくしは上記の3つの立場のうち、第3の「包括主義」に親近感を覚えます。わたくしは幼年期に燃料工場を経営していた父が、毎朝職場で神道の礼拝をしていたその敬虔さに感銘をうけて、その礼拝を真似て遊ぶようなことがありました。父の死後は、母が毎晩浄土真宗の「おつとめ」（勤行）をするのに加わって、小学生でしたけれど「他力本願の浄土真宗の信仰」（プロテスタント的な信仰義認の教えと共通するものがあります）を植えつけられました。第二次世界戦争が終わったとき、日本国民の民族的な懺悔と新生が求められる中で、私は兄が送ってくれた矢内原忠雄先生や賀川豊彦先生の著作に触れて、キリスト教に導かれました。香川県の多度津教会で洗礼を受けましたが（1948年12月15日）、その決心を母に話したところ、熱心な仏教徒であった母は、家族が仏教の浄土とキリスト教の天国に分かれるのは困ると真剣に訴えました。わたくしは当時旧制中学の3年生でしたが、母に対して、浄土とか天国とか言うけれども、人間を生まれさせ、死後この世から引き取る力（神の力）は、人間すべてに共通だと思う、と答えました。そして、その力の根源について、自分に最も納得のゆくお方を信じ受け入れる事は、自分と親兄弟を離すことでなくて、そのつながりを作ってくれる方に導かれることになると思うと話しました。それを聞いて、母はわたし

